第一一章　大幣の霊験（一一）

一歩々々辛うじて前進すると、広大な池があった。（て、）池の中に（水）は全部いやらしい毛虫がウザウザしておる。その中に混って馬の首を四ツ合せたような顔をした蛇体で角が生えたものが、（赤い）舌をペロペロ吐き出しておる。この広い池には、細い細い氷の橋が一筋長く向う側へ渡してあるばかりである。後から※「松」（印、）「中」（印、）※「畑」という（小印の）鬼が十字形の尖った槍をもって突きにくるので、前へすすむより仕方はない（のである）。十人が十人ながら、（この細い橋から、）池へすべり落て毛虫に（全身を）刺され、どれもこれも〈全身〉腫あがって、痛さと寒さに苦悶の声を〈しぼり〉、虫の鳴くように呻っておる状態は、ほとんど瀕死の病人同様である（った）。その上、怪蛇が一人々々カブッとくわえては吐きだし（又くわえては吐き出し）、骨も肉も搾ったようにいじめて（なって）おる。自分（王仁）もこの橋を（堂しても）渡らねばならぬ。（假令）自分は〈幸に〉首尾よく渡りうるも、連の人々はどうするであろうかと心配でならぬ。躊躇逡巡進みかねたるところへ、「三葉殿」と頭の上から優しい女の声が聞えて（たかと思うと）、〈たちまち〉一本の※大幣が前に降ってきた。（王仁は）手早く手にとって、思わず『※祓戸大神祓いたまえ清めたまえ』と唱えた。広い池はたちまち平原と化（変化）し、鬼も怪蛇も姿を消

※「松」……松井元利氏。

※「畑」……畑中伝吉と言って、聖師さまの宣教先を先回りして、ことごとに邪魔して回った男。

※小印……小悪魔的な存在で、つねに聖師さまの動行にたいし邪魔して回る連中のこと。

※大幣……左の図。祓いに用いる。

※祓戸大神……瀬織津比売大神（地上の各地より、すべての汚れを大海原に持ち出し清める神霊の活動）・速秋津比売大神（風に雨をそえて草木を清め、また海洋に流れ出した汚穢を清める神霊の活動）・気吹戸主大神（風を吹かして空気を清める神霊の活動）・速佐須良比売大神（摩擦によって総べての汚れを根本的に清める神霊の活動）の

してしまった。数万人の老若男女の幽体はたちまち蘇生したように元気な顔をして、一斉（一切）に「三ツ葉様」（救世主）と叫んだ。その声は、天地も崩れんばかり（の勇ましさ）であった。各人（各自）の産土の神（大神）は※綺羅星のごとくに出現したまい（されて）、自分の氏子々々を引連れ、歓び勇んで帰って行かれる有難さ（のであった）。

自分（王仁）は比礼の神器を舟木に渡して、困っておったところへ、金勝要神（禁闕要の神）より、大幣をたまわったので、百万の援軍を得たる心地して、名も知れぬ平原をただ一人またもや進んで行く（のであった）。

一つの巨大な洋館が、儼然（厳然）として高く雲表にそびえ立っておる。門口には厳めしき冥官が鏡のような眼を見張って、前後左右を首をめぐらし（て）監視しておる。部下の冥卒が数限りもなく〈現われ、〉各自に亡人（罪人）を酷遇する（して居る。）その光景は筆紙につくされない惨酷さである。自分（王仁）は大幣を振りながら、館内へ歩をすすめた。冥官も、冥卒もただ黙して自分（王仁）の通行するのを知らぬふうをしている（居った）。「キャッキャッ」と叫ぶ声にふりかえる（って見る）と、沢山の婦女子が口から血を吐いたり、槍で腹部を突き刺されたり、（澤山の）赤児の群に全身の血を吸われたり、毒蛇（毒蛇）に首を捲かれたりして、悲鳴をあげ（て）七転八倒していた（居る）。冥卒が竹槍の穂で、頭といわず、腹といわず、身体処かまわず突きさす（し）〈恐ろしさ〉、血は流れて滝となり（瀧の如くに流れて）、異臭を放ち、惨状目もあてられぬ光景である。〈またもや〉（王仁は）大

四柱の神を総称していう。

※綺羅星……キラキラと光り輝く星。

幣を左右左に二三回振りまわした。（すと、）今までのすさまじき幕はとざされ（明いて）、婦女子の多勢が自分（王仁）の脚下に涙を流して集まりきたり、中には身体に口をつけ「三ツ葉様、有難う、辱なう（救世主様難有う難有う）」と、異口同音に嬉し泣きに泣いておる。一天たちまち明光現われ、各人（各自）の産土神（大神）は氏子を伴ない、合掌しながら、光とともにどこともなく帰らせたまうた（って行かれるのであった）。天の一方に〈は〉歓喜にみちた声が聞える。（たが、）〈声は〉次第（々々）に遠ざかって終には風の音のみ耳へ浸みこむ（這入るのであった）。